

平成25年12月3日、市長と政策秘書課職員との話について紹介します。

会社勤めの人であれば、「自分が体調不良で休んでも、会社は支障なく業務が進んでいた」という経験をお持ちの方も多いでしょう。

私もサラリーマン時代、3カ月ほどの入院をした経験があります。営業担当だった私は、「あの会社は、私からしかモノを買ってくれない」と、家族の反対を押し切って会社近くの病院に入院しました。実際は、私がいなくても会社は何の問題もなく回り、自分は歯車の一つに過ぎないと実感しました。

今は、大人のみならず、子どもさえも社会の歯車の一つになってしまっていて、「あなたが必要だ」と言われることはほとんどありません。だからこそ、私は、長久手市に暮らす私たち一人ひとりが、「私は必要とされているんだ」と実感できるまちにしたいと考えています。

介護職員が絶対的に足りない時代がやってくる

寝たきりの人は、今日も明日も介護をしてもらわないといけないので、いつも「ありがとう」「申し訳ないなあ」と頭を下げています。本当は、頭を下げるだけではなく、人の役に立ちたいと思っているのです。

現在、施設では、高齢者2に対し、介護職員1の「2対1」で対応しています。それでも、入所者1人に対し、1日2時間程度しか介護職員は対応することができません。介護保険を使って、自宅でヘルパーさんを利用してもその程度です。

現在の介護制度では、1日に2時間しかプロは関わられません。その結果、施設の職員は、「ちょっと、ちょっと」と入所者に呼びかけられても、忙しさのあまり「後で…」と言うしかありません。職員は、「後で…」「後で…」と言っているうちに、申し訳なくなつて、今度は、その人の前すら通ることができなくなります。そうして寝たきりの人は、孤独のうちに1日を過ごすこととなります。

一方で、みなさんは、介護はプロに任せたいとおっしゃいます。今ですら、こんな状態です。長久手市では、2050年には、認知症の方は3,000人になると予測されます。現在の2対1の割合でも、1,500人の介護職員が必要です。しかし、介護職員は、仕事の大変さや給料の低さから、なり手が多くはありません。絶対的に介護職員の数が不足していくのです。

あまりピンと来ないかもしれませんが、「介護はプロに任せたい」では立ち行かなくなる時代がすぐそこまで来ているのです。

11月30日に文化の家で開催された「共生フォーラム in ながくて」で、公益財団法人さわやか福祉財団の堀田力理事長が、基調講演の中でこんな事例を紹介してくださいました。秘書担当職員の聞き取りメモから抜粋して紹介します。



人間、最後のときは安らかに幸せに過ごしたいと願うものです。

実際は、病院や施設に入り、あまり家族が来てくれない、人によっては管につながれてしまう。誰もが本当はそういうのは「嫌だ」と思っています。

在宅で、その人らしく、最後に「生きていて良かった」と思えるようにしてあげるには、どうしたら良いか。そのためには、行政、医師、看護師、保健師、ヘルパーさんなど介護に携わる人、ボランティア、家族、そして何より本人も、みんなで力を合わせる必要があります。

国や行政には、しっかりした仕組みを作るという第一の責任があります。介護保険制度において、既に2年前から24時間いつでも自宅に訪問するサービス（正式には、「定期巡回・随時対応型訪問介護看護」と言います。）の提供が制度として実施されています。長久手市内でも2事業所が、平成23年度の国のモデル事業として試行されたとのことで、うち1事業所は来年1月から本格実施されると伺っています。

地域での支え合いについてですが、寝たきりの人は、「お世話されるのは有難い。でもやっぱり人の役に立ちたい」と思っておられる。

私の知る話でこんなことがあります。

ある寝たきりのおばあちゃんは、編み物が得意で人に教えたいと思っておられた。そこで地域のボランティアが、おばあちゃんに編み物を習いに行くことにしました。それもボランティアの一つです。その寝たきりのおばあちゃんは、人に得意な編み物を教えることで「自分は人の役に立っている」とイキイキとされ、その約2週間後に亡くなられたそうです。

“お互いさまで、支え合う”。どっちも楽しくなるのが、助け合いです。助け合いの報酬は、相手の笑顔です。こうした地域の助け合いと、24時間のサービスが組み合わせられれば、地域で暮らし続けることが可能になってきます。

2年後、介護保険の要支援1、2の方には、自治体がサービスを提供することになります。厚労省は、そのサービスは、ボランティアやNPOを中心に担うという方法を考えています。自治体がお金を出してするのは簡単です。

でも、助け合いの共生のやり方の方が、保険料のアップも抑えられ、お互いに楽しいし、うれしい。こうした活動が盛んな地域こそ、住んでいて楽しいし、地域で暮らし続けることができるのです。

2年後の制度改正は、変わるチャンスでもあります。「お互いさまで支え合う」ことについて、みんなで考えるきっかけ、みんなで始めるチャンスと捉えられたいと思います。

立川市の大山団地など、全国には積極的に活動している地域がたくさんあります。ぜひ、参考にさせていただければと思います

～市長の話を聞いて～

市長が、私にこの話をされたとき、「孤独がいかに辛いものか、一度、介護の現場を見てくるといい」と言われました。2年前、私は前の部署の仕事で、介護施設を訪問させていただく機会がありました。訪問を歓迎してくださる方が多かった中、遠くから眺めてはいるけれど、輪には加わらない方が何名かいらっしゃいました。そのとき、私は「もし、私が施設に入ったときは、何でも楽しめるおばあちゃんになりたい」と思ったのを覚えています。

今思えば、「こんにちは」と声かけをすればよかったと思います。“楽しめない”のには、理由があったんだと思います。そのときは、そんなことを思いもしませんでした。「孤独がいかに辛いか」を聞いた今の私は、当時と違った行動がとれるのか、もう一度、訪問させていただければと考えています。